論文の和文要旨	
論文題目	日本語と韓国語の初対面二者間会話における対人配慮行動の対照研究 ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー
氏名	李　恩美(イ　ウンミ)

本研究は、円滑な人間関係を保つための対人配慮が言語行動にどのように反映されているかを、スピーチレベルとヘッジという言語行動に焦点を当てて考察するものである。談話の中でそれらの言語行動が持つ機能と、それらを生じさせる要因(年齢と性別)を、日本語と韓国語の初対面二者間の自然会話の比較・対照を通じて明らかにすることを試みた。その際、日本語と韓国語における対人コミュニケーションを円滑に進めるためのポライトネス・ストラテジーのあり方を、言語間の普遍性を主張するポライトネス理論(Brown & Levinson1987)の考え方を発展させた、「ディスコース・ポライトネス」(宇佐美2001a;2001b;2002;2003b;Usami1999;2002;2006c;2006d;2006e)という観点から分析・考察した。

本研究は全9章からなっている。以下に各章の概略を述べる。

第1章では、研究の背景、関連する先行研究をまとめ、本研究の概要を示している。
まず、これまでの日本語と韓国語におけるポライトネスの研究が、ポライトネスを単に「言語形式の丁寧さ」と見做し、ポライトネス研究を敬語及び待遇表現の研究と混同する傾向があったのを指摘した。また、本研究の研究対象の一つのスピーチレベルを「敬語」という観点からだけでなく、ヘッジと関連付けて分析する観点の新しさを提示し、それは、「ポライトネス」、「ディスコース・ポライトネス」という観点で見るから可能なことであることを指摘し、これらの理論と本研究との関連性を述べ、その観点から分析する必要性を強調した。次に、関連する先行研究を検討し、条件統制された自然会話をデータとして、談話レベルで分析をするという本研究の方向性を提示した。次に、関連する先行研究を検討し、条件統制された自然会話をデータとして、談話レベルで分析をするという本研究の方向性を提示した。

第2章では、研究方法について述べている。
まず、本研究で採る方法論である「自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ」に

ついて述べ、このアプローチが、実際の相互作用における言語使用のダイナミズムを捉えるために適していることを示した。

次に、実験計画、被験者、実験手順について述べた。本研究では、被験者による言語の操作を分析するために、その主な原因とされている、被験者の年齢と性の要因を変化させ、ベースとなる一人の被験者に、同性と異性の「目上」「同等」「目下」の相手と会話をしてもらった。さらに、会話データの妥当性と会話分析の結果の信頼性を裏付けるため、会話の二次データとしてフェイスシートとフォローアップ・アンケートを実施した。収集した会話データの文字化の方法については、本研究では、人間心理と対人コミュニケーションのメカニズムを解明するための有用なデータとしての自然会話を研究するために考案された「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美、1997、2003a、2007)と「基本的な文字化の原則：韓国語版(Basic Transcription System for Korean: BTSK)の試作版（第 1 版）」(宇佐美他、2007)を用いることを述べた。また、文字化した会話データを数量化し定量的な分析が可能になるように、「発話文」を分析の単位としてすべての発話文を言語形式と相互作用における機能という観点から分析項目別にコーディングする過程を詳細に述べた。最後に「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa)」を測定し、会話データ及び分析項目の信頼性について検討した。

第 3 章では、フォーローアップ・アンケートの結果を分析し、対話相手の年齢・社会的地位の認知と収集された会話データの「自然さ」など、本研究におけるデータの「妥当性」を確認した。さらに、データの基本情報となる発話文数を提示した。

第 4 章では、本研究の 1 つ目の分析対象である「スピーチレベル」の結果を示している。発話文のタイプ(実質的発話文(SB)、あいづち的発話文(BA))、スピーチレベル(発話文末のスピーチレベル、発話文全体のスピーチレベル、語彙レベルのスピーチレベル)、丁寧度を示すマーカーのない発話(NM)の発話文タイプ(言い切っている発話文(C)、言い切らない発話文(I))について、日本語と韓国語それぞれにおける使用割合を、ベースの性別、対話相手の性別・年齢の要因別に分析した。

主な結果は以下の通りである。

まず、発話文のタイプにおいて、日本語と韓国語ともに、年齢の差がある対話相手に対し、あいづち的発話文(BA)の使用割合が高く、同年齢の対話相手に対し、実質的な発話文(SB)の使用割合が高かった。年齢差がある対話相手に対して、あいづち的発話文(BA)の使用割合が高くなっていることは、年齢差から生じる心理的距離を縮め、対話相手の発言を促進するための配慮となり、円滑なコミュニケーションを図るための一つのポライトネス・ストラテジーとして働いていると考えられる。同年齢の相手に対して実質的発話文(SB)の使用割合が高くなっていることは、年齢差のある対話相手に比べ、同年代ということで心理的距離が縮まり、お互いが積極的に会話に参加していることを示唆していると考

えられる。

次に、スピーチレベルにおいては、日本語と韓国語ともに全ての会話において敬体(P)の使用割合が最も高く、50%以上であり、ディスコース・ポライトネス理論の観点からは、敬体(P)が初対面社会人二者間会話における無標スピーチレベルであることが分かった。その他に、日本語は韓国語に比べ、丁寧度を示すマーカーのない発話(NM)の使用割合がやや高く、韓国語は日本語に比べ、常体(N)の使用割合がやや高いことが分かった。

韓国語は、発話文末のスピーチレベルの使用割合において、敬体(P)は対話相手の年齢に比例し、常体(N)は対話相手の年齢に反比例している。さらに、語彙レベルのスピーチレベルにおける尊敬語・謙譲語など(S)の使用においても、その使用割合が対話相手の年齢と比例している。つまり、韓国語は、日本語に比べ、敬体(P)や常体(N)といった発話文末の言語形式と尊敬語・謙譲語など(S)の使用に、対話相手との年齢から生じる上下関係が強く反映されており、「話者個人の方略的な言語使用」よりも「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」の方が重視されていることが窺えた。

それに対して、日本語は、常体(N)の使用割合は対話相手の年齢に反比例しているが、敬体(P)は、同年齢の対話相手に対しもっとも使用割合が高かった。しかし、実質的な発話文(SB)から丁寧度を示すマーカーのない発話(NM)を除いた場合の(P)の使用割合を見ると、ほぼ対話相手の年齢に比例していることが分かった。日本語の場合は、対話相手との年齢から生じる上下関係を、敬体(P)といった発話文末の言語形式を用いてはっきりさせるより、丁寧度を示すマーカーのない発話(NM)を多用することで、「言語形式によって人間の上下関係をマークすること」をあいまいにしていることが窺えた。その代わり、通常対話相手の待遇を表す発話文末にそれを示すマーカーがない(NM)場合は、発話文全体や語彙レベルにおける敬体(P)や常体(N)のスピーチレベルの選択を通して「敬語使用」の規範に従っており、対話相手への配慮を表わしていることが示唆された。つまり、日本語の場合は、スピーチレベルの選択に「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」の二つの側面が関わっていると解釈できる。さらに、日本語においては女性が、韓国語においては男性が、言語形式の丁寧度の高い表現を多く使う傾向にあることが分かった。さらに、日韓両言語において、話者の性別とは関係なく、男性の対話相手に対してより言語形式の丁寧度の高い表現を使う傾向があることが分かった。

また、発話文末が丁寧度を示すマーカーのない発話(NM)の場合の実質的な発話文のタイプである「NM の発話文タイプ」を見ると、日本語と韓国語ともに、使用割合において言い切らない発話文(I)は対話相手の年齢に比例し、言い切っている発話文(C)は対話相手の年齢に反比例しており、対話相手の年齢から生じる上下関係を反映していることが分かった。言い切らない発話文(I)は敬体的な働きを、言い切っている発話文(C)は常体的な働きをしていることが窺えた。

第 5 章では、「スピーチレベル」を談話レベルで動的に捉えた「スピーチレベル・シフ

ト」の結果を示している。

Down シフト(D)、Up シフト(U)、No シフト(N)について、日本語と韓国語それぞれにおける使用割合を、ベースの性別、対話相手の性別・年齢の要因別に調べた。

主な結果は以下の通りである。

スピーチレベル・シフトは、日本語と韓国語ともにベースの性別を問わず、Down シフト(D)の割合は、年上の対話相手にもっとも低く、No シフト(N)は年下の対話相手にもっとも高いことで、年上の人に対してよりポライトな言語行動をしており、年齢という上下関係がスピーチレベル・シフトという言語行動に表れていることが窺えた。なお、韓国語においては、年上に対しては、Down シフト(D)と No シフト(N)の割合の合計よりも Up シフト(U)の使用割合が高く、Down シフト(D)した主体が自分にしても、相手にしても、Down シフト(D)されたらすぐに無標スピーチレベルである「敬体(P)」に戻ろうとする傾向が日本語に比べてより強いことが窺えた。

スピーチレベル・シフトは、Down シフト(D)や No シフト(N)することでポジティブ・フェイスを満たし、また、Up シフト(U)することで相手のネガティブ・フェイスを脅かすことを避けており、円滑なコミュニケーションのためのポライトネス・ストラテジーとして機能していることを指摘した。このようなスピーチレベル・シフトの機能は、文レベルでは捉えることのできないものであり、談話レベルから見ることによって初めて明らかになることと言える。

第 6 章では、本研究のもう一つの分析対象である「ヘッジ」に関する結果を示している。

本研究では、推量をしたり、または、断定や限定を避けたり、明言や断言をせずにぼかすことで発話内容の力を和らげる(弱めたり、緩和する)表現をヘッジと定義し、「1 発話文当りのヘッジ」、「発話文全体のヘッジ」、「発話文末のヘッジ」について、日本語と韓国語それぞれにおける使用割合を、ベースの性別、対話相手の性別・年齢の要因別に調べた。

主な結果は以下の通りである。

ヘッジは、韓国語に比べ日本語の方が「1 発話文当りのヘッジ」の使用頻度が高く、さらに、現れる位置とは関係なく、韓国語に比べ日本語においてより多く用いられた。つまり、日本語の方が韓国語に比べ、ヘッジを多用することで、話し手と聞き手との間の緊張を和らげようとする程度が高い。断定などを避け、発話の内容を柔らかくし、発話をポライトにするポライトネス・ストラテジーとしての機能をより果たしていると言えよう。

ヘッジの使用と対話相手の年齢との関係を見ると、韓国語においては、「1 発話文当りのヘッジ」、「発話文全体のヘッジ」、「発話文末のヘッジ」の使用割合が対話相手の年齢と比例していたが、日本語においては、「1 発話文当りのヘッジ数」のみにその傾向が見られた。韓国語におけるヘッジは、日本語に比べ、「敬体(P)」のようなネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての機能がより強いことが窺えた。

次に、ヘッジと性別の要因の関係を見た場合、日本語の場合は、女性の対話相手に対し「発話文末のヘッジ」の使用割合がやや高くなっているが、全体的に日本語と韓国語ともに対話相手の性別によるヘッジの使用割合の差はあまり見られない。一方、ベースの性別ごとにヘッジの使用を見ると、「1 発話文当りのヘッジ」、「発話文全体のヘッジ」、「発話文末のヘッジ」の全ての項目において、日本語は男性ベースの方が、韓国語は女性ベースの方が、使用割合が高い。ヘッジが、断定を回避し、表現を柔らかくする点で、発話をよりポライトにしていることを考えると、ベースの性別によるスピーチレベルの使用の結果とは反対の傾向である。このことから、日本語と韓国語ともに、ヘッジとスピーチレベルを組み合わせて使うことにより、バランスよくポライトな発話を交わしていることが窺えた。

第 7 章では、各スピーチレベルに対するヘッジの共起という観点から、スピーチレベルとヘッジの関連性について、日本語と韓国語それぞれにおける使用割合を、ベースの性別、対話相手の性別・年齢の要因別に調べた。

主な結果は以下の通りである。

スピーチレベルとヘッジとの共起を見ると、日本語は、常体(N)>丁寧度を示すマーカーのない発話(NM)>敬体(P)、韓国語は、常体(N)>敬体(P)>丁寧度を示すマーカーのない発話(NM)の順でヘッジとの共起率が高い。つまり、日本語と韓国語ともに、常体(N)との共起の割合がもっとも多く、言語形式の面からは丁寧度が低いものの、ヘッジという言語形式以外の装置を補うことで、発話をよりポライトにしていることが窺えた。さらに、敬体(P)とヘッジの共起を見ると、「発話文全体のヘッジ」においては、日本語と韓国語ともに共起率が対話相手の年齢に比例しており、「発話文末のヘッジ」においては、韓国語のみが共起率が対話相手の年齢に比例していた。つまり、日韓ともに、年上の対話相手に対しては、言語形式の丁寧度の高い敬体(P)とともにヘッジをも用いることで、発話をよりポライトにしようとする傾向があり、その傾向は韓国語においてより顕著であった。ヘッジは、スピーチレベルと共に一つのポライトネス・ストラテジーとして機能を持っていると言えよう。

第 8 章では、第 4 章から第 7 章までのスピーチレベルとスピーチレベル・シフト、またヘッジの分析結果を、ディスコース・ポライトネス理論における鍵概念(宇佐美 2008 予定)を用いながら、ディスコース・ポライトネス理論の観点から総合的に考察した。具体的には、スピーチレベルとスピーチレベル・シフト、またヘッジを、無標ポライトネスとしてのディスコース・ポライトネスの基本状態を構成する要素として捉え、日本語と韓国語の「社会人初対面会話」という談話の基本状態を同定することによって、そこから離脱した言語行動(有標行動)がもたらすポライトネスが相対的に捉えられることを強調した。さらに、異文化間コミュニケーションにおける誤解やミス・コミュニケーションの原因解

明や問題解決、日本語と韓国語を第二言語とする学習者の円滑なコミュニケーション方法の習得など、より円滑な異文化間コミュニケーションの確立のために、各々の言語文化における主要な「談話行動」の「基本状態」を同定する調査研究を行い、その結果を蓄積していく必要があることを指摘した。

第９章では、本研究を総括し、第二言語教育への示唆及び今後の課題について述べた。

本研究では、一見、互いに関連のないように思われるスピーチレベルとヘッジを取り上げ、スピーチレベルの各項目とヘッジの共起関係という観点からスピーチレベルとヘッジを一つの枠組みの中で分析することにより、スピーチレベルとヘッジは、相互に密接に関連しており、円滑なコミュニケーションを保つために対話相手への配慮を表していることを示した。さらに、日韓ともに、「円滑な人間関係を保つための言語行動」としてのポライトネスは、単に「尊敬語」や「謙譲語」または「丁寧語」のような、敬語の使用という「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」のみによって実現されるのではなく、「丁寧度を示すマーカーのない発話」や「スピーチレベル・シフト」、また「ヘッジ」のような戦略的な「話者個人の方略的な言語使用」と共に実現されており、韓国語に比べ、日本語の方が「話者個人の方略的な言語使用」の側面が強いことを明らかにした。このような、スピーチレベルとスピーチレベル・シフト、およびヘッジの使用は、円滑なコミュニケーションと相互理解のための重要なポライトネス・ストラテジーとして機能しているということを結論付けた。